

# メンバーのサークルの関わり方とサークル活動への評価

—子育てサークル活性化のために—

結 城 恵

## < キーワード >

子育てサークル 地域の子育て環境づくり 子育て支援 サークル活動への関わり方 サークル活動への評価

## < 要 旨 >

近年、子育てサークルの活性化が、地域での子育て環境づくりの一環として注目されている。子育てサークルは、いわゆる、子育て「同好会」であり、メンバーに対する強制や強固な目標設定が存在しない点に特徴がある。したがって、子育てサークルを運営する側にとっても、それを外部から支援する側にとっても、メンバーの自主的な活動で成立する緩やかな集まりを、どう設立し、維持していくかが重要な課題となっている。

本稿では、平成12年度文部科学省委嘱事業「家庭教育に関する活性化方策の推進」事業の一環として実施した「子育てサークルの活動に関する調査」に基づき、メンバーが子育てサークルにどのように関わっているのか、子育てサークルへの関わり方によって、メンバーのサークル活動への評価や今後の活動意向にどのような影響を及ぼすのか、を分析した。さらに、その結果をもとに、子育てサークルを活性化する方法を検討した。

メンバーの子育てサークル活動への関わり方には、「気楽だが熱心に」参加する型、「気遣いながら一生懸命に」参加する型、「気遣いながら消極的に」参加する型、「気楽に気ままに」参加する型、の4つに分類された。今回の調査対象者の大半は、「気楽だが熱心に」参加する者か、「気楽に気ままに」参加する者のいずれかで、両者に共通する「気楽なサークルへの関与の仕方」が、サークル活動の負担や不満が大きくならないように作用していることが判明した。一方、少数派ではあるが、「気遣いながら一生懸命に」参加する者と「気遣いながら消極的に」参加する者がみられ、これらのグループでは、その「気遣い」と気疲れが作用して、サークル活動にネガティブな評価をもつ傾向のあることが判明した。

以上の知見から、サークルの活性化には、「気遣い」を取り除き、「気楽なサークルへの関与」を奨励する方策が求められる。具体案として、気楽に声がけをしたり、相手が身構えないような話し方、相手の立場に立って話を聞いてみる、など、円滑な人間関係を築くうえで役に立つ方法を身につけるワークショップの開催などが考えられる。

## 1. 子育てサークルと子育て支援

子育てサークルとは、「子育て中の親たちが子どもを連れて集まり、子ども同士を遊ばせながら、学習や情報交換をしたり、運動会やクリスマスなどの行事を協同で実施したりする」サークルで<sup>1)</sup>、この10年ぐらいの間に全国各地で急増している。現在では、居住する地域を核としたサークルだけではなく、双子のための子育てサークルやパソコンでネットワークする子育てサークルのように、興味・関心を核に地域を超え、コミュニケーションの手段も多様化したさまざまなサークルが生まれている。

また、子育てサークルに対して積極的に支援し、地域の家庭教育力を高めようとする自治体も多い。子育てサークル間の情報交換を活発に行い、親のニーズに合う子育て支援施策を協同で検討しようとする試みや、実際に子育てサークルを作る人材を子育て中の母親から募って育てる試みなど、多様な実践が展開しつつある。

しかしながら、子育てサークルは、いわゆる、子育て「同好会」であり、メンバーに対して強制や強固な目標設定が存在しない点に特徴がある。したがって、子育てサークルを運営する側にとっても、それを外部から支援する側にとっても、メンバーの自主的な活動で成立する緩やかな集まりをどう設立し、維持していくかが重要な課題となっている。

たとえば、ある地方自治体の関係者は、次のように指摘した。

「(お母さんがたに)『本当に来て楽しかった』って言って欲しいなっていう気持ちが指導員にありまして、そういう意味ではお母さん方もこちらの期待に応えてくれるんですけれども、責任がないっていうか、来て楽しかった、で、帰っていく。サークルとか、一歩踏み出したことを自分たちでやろうっていう気もないですし、その準備をしてもらって参加するだけ。(中略)せっかく子育てサークルを育てようと作られた児童センターも、お母さん方が公園化しているんじゃないかなあ。っていうことも言われまして、こういうあり方はいいのかなあと悩んでいます」<sup>2)</sup>

また、ある子育てサークルのリーダーは、サークルへの関わり方には実にデリケートな部分があるという。

「(リーダーが)あんまり一生懸命すぎると嫌がられるってあるじゃないですか。サークル活動はみんなで盛り立てて行かなきゃって思いがあるんだけど、あんまり、ああだこうだって仕切っちゃうと、逆に、みんな動かなくなっちゃうのね。だから、ときどき、ぽかっと抜けちゃって、私がいい加減にしてるくらいのほうがいいみたい。サークルな

んだもんね。だれが上でだれが下ってことがない、輪っかなんだ、って思うようにして、(リーダーを)やってきたのかな。」<sup>3)</sup>

それでは、メンバーの自主性をどのように引き出すことができるのだろうか。メンバーに継続的にサークルに参加してもらうには、どうすればいいのだろうか。本稿では、この問題を検討するために、まず、子育てサークルに参加しているメンバーの、サークルへの多様な関わり方をとらえる。次に、そうしたサークルへの関わり方が、メンバーのサークル活動への見方や評価に与える影響を分析する。そして、その知見に基づき、子育てサークル活性化に有効な働きかけを検討する。

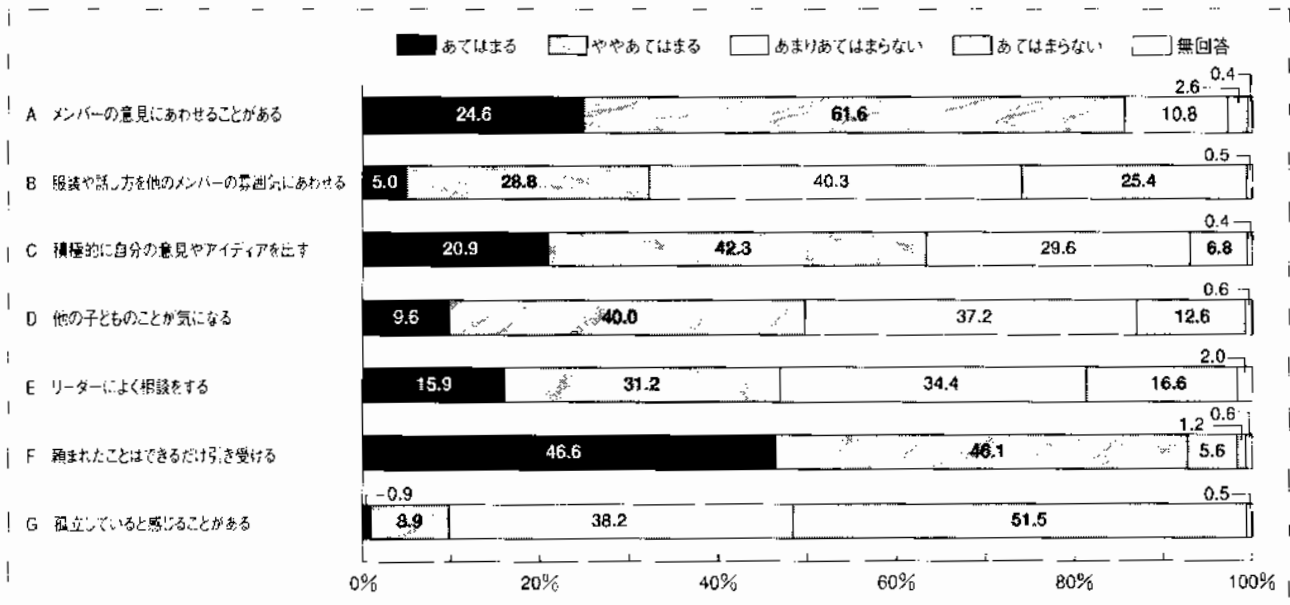
## 2. 「子育てサークルの活動に関する調査」

本稿が依拠するのは、平成12年度文部科学省委嘱事業「家庭教育に関する活性化方策の推進」事業の一環として行われた、「子育てサークルの活動に関する調査」データである<sup>4)</sup>。この調査は、地域における家庭教育支援として子育てサークルの実践に焦点をあてたもので、子育てサークルの実態を調べた、はじめての全国調査である。調査は、11都府県から抽出した1000の子育てサークルに所属する、サークルリーダー1000人(リーダー調査)およびサークルメンバー5000人(メンバー調査)を対象とし、運営や活動の状況の仕方、行政との関係、サークル活動の抱えている課題などについて調べた。調査期間は、平成13年1月19日～2月7日、有効回答率は、リーダー調査が57.1%、メンバー調査が43.9%だった。本稿では、このうちメンバー調査を分析の対象とした。

上記の調査で明らかになった子育てサークルのメンバーの実態を概観しておこう<sup>5)</sup>。メンバーの、サークル加入年数は、「5年以上」が約5割、「1年未満」が約3割を占めていた。サークルの平均加入期間は、平均4年9ヶ月。サークルへの参加頻度は、全体の8割以上が「ほぼ毎回(89.2%)」参加しており、「2回に1回程度(11.0%)」、「3回に1回以下(5.8%)」はそれぞれ1割程度にとどまっている。サークルに加入するきっかけになったのは「自分の友だち(49.0%)」が最も多く、「子どもの友だち(26.8%)」、「自治体の広報誌(21.4%)」が続く。サークルの活動は、「親同士のおしゃべり(87.4%)」、「子どものあそびづくり(73.0%)」の2つが主たる活動であり、「子育てに関する悩み相談(48.2%)」は、約半数が行っていた。

次に、本稿で焦点をあてる、メンバーのサークル活動への関わり方に関しては、上述した調査では、7つの項目に

図1 他のメンバーとの接し方 (N=2,195)



わたりたずねている。図1は、その結果を示す。この表に示すように、「F 頼まれたことはできるだけ引き受ける」「A メンバーの意見にあわせることがある」に、「あてはまる」または「ややあてはまる」と答えたメンバーは8～9割を占めていた。また、「C 積極的に自分の意見やアイデアを出す」と答えたメンバーは6割を越え、サークル活動に積極的に関与している人も多いことがうかがえる。

また、「D 他の子どものことが気になる」「E リーダーによく相談をする」については、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた者と「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と答えた者に二分されたが、「B 服装や話し方を他のメンバーの雰囲気にあわせる」メンバーは比較的少なく、「G 孤立していると感じることがある」メンバーは1割にも満たない。以上のように、大半のメンバーは、リーダーや他のサークルメンバーに対して協調性をもった接し方をし、メンバー間には円滑な関係が形成されていることが判明した。

### 3. 協同性志向と関係性志向

上述した調査では、メンバーの全般的な傾向をとらえた。実際には、メンバーのサークル活動への関わり方は多様である。その多様な関わり方をとらえるために、まず、上述した7つの項目について因子分析をした。その結果、2つの因子が抽出された(表1)。

第一因子は、「サークルでは積極的に自分の意見やアイデアを出す」「リーダーによく相談する」「メンバーに頼まれたことはできるだけ引き受ける」で構成される。これら

は、いずれも、サークル活動が他のメンバーやリーダーとの協同作業であることを意識した行動であるという点で共通しており、「協同性志向」と命名した。

第二因子は、「服装や話し方などメンバーの雰囲気にあわせるようにする」メンバーの意見にあわせることがある」「メンバーのなかで孤立していると感じることがある」「他のメンバーの子どものことが気になる」で構成される。これらは、いずれもサークルの他のメンバーの雰囲気や意見の流れを察し、それに歩調を合わせることを意識した行動であるという点で共通しており、「関係性志向」と命名した。

このことから、子育てサークルに参加するメンバーは2つの意識、すなわち、サークル活動は他のメンバーとの協同作業で成り立ち、自らも積極的に活動に参加していこうとする意識(「協同性志向」と)、サークル内の雰囲気を重視しながら、自らの行動を全体の歩調に合わせようとする意識(「関係性志向」)に影響を受けながら、サークル活動に関わっていると考えられる。そこで、これら2つの意識

表1 サークル内行動志向の因子分析 (Varimax 回転後)

F1 協同性志向	
C. サークルでは積極的に自分の意見やアイデアを出す	0.794
E. リーダーによく相談をする	0.729
F. メンバーに頼まれたことはできるだけ引き受ける	0.653
F2 関係性志向	
B. 服装や話し方など他のメンバーの雰囲気にあわせるようにする	0.732
A. メンバーの意見にあわせることがある	0.625
G. メンバーのなかで孤立していると感じることがある	0.566
D. 他のメンバーの子どものことが気になる	0.518

の違いにより、メンバーのサークル活動への見方や評価にどのような影響があるのかを検討することにした。

まず、サークル内行動志向の2因子(協同性志向、関係性志向)それぞれについて、得点の高い群と低い群に分けた。協同性志向の高位群には1115人(52.1%)、低位群には1024人(47.9%)が属し(図1)、関係性志向の高位群には236人(11.0%)、低位群には1903人(89.0%)が属した(図2)。

それでは、協同性志向あるいは関係性志向が高いか低いかで、メンバーのサークル活動に対する見方や評価には、何らかの違いがみられるのだろうか。そこで、協同性志向ならびに関係性志向の高位群・低位群別に、(1)サークルの評価、(2)サークル加入による変化、(3)今後の活動意向、の3点に関するメンバーの見方を比較・整理した。

#### (1) サークルの評価

サークルの意見交換やサークルのまとまりについて、メンバーがどのような評価をしているのかを、協同性志向あるいは関係性志向の高位群・低位群で比較した(表2)。

その結果、協同性志向の高位群は低位群よりも、「A 子育てや家庭の悩みをメンバー間で本音で出し合える」「B 子育ての方法についてアイデアを交換することが多い」「C メンバーはまとまっている」と評価する割合が顕著に高く、また、「E サークルの運営方針についてメンバー間で意見が割れることがある」と感じている者も多いことがわかった。

一方、関係性志向についてみると、「A 子育てや家庭の悩みをメンバー間で本音で出し合える」「C メンバーはまとまっている」と評価する割合は、高位群よりも低位群の方が顕著に高く、「D メンバー間に派閥のようなものがあると感じることがある」「E サークルの運営方針についてメンバー間で意見が割れることがある」と感じる者が高位群に顕著に多いことも判明した。

すなわち、サークルでの意見交換やサークルのまとまり

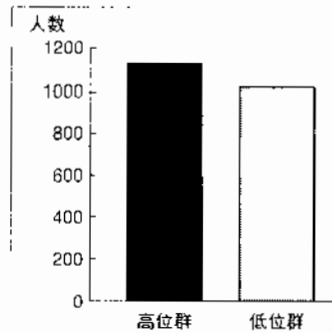


図2 協同性志向の高位群と低位群 (N=2,150)

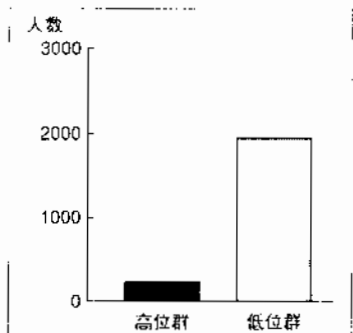


図3 関係性志向の高位群と低位群 (N=2,174)

については、協同性志向が低いメンバーより高いメンバーの方が肯定的な評価をし、関係性志向の低いメンバーより高いメンバーの方が、否定的な評価をしている傾向がみられた。

#### (2) サークル加入による変化

メンバーは、サークル加入により、1 自分自身、2 配偶者や家族、3 子どもが、それぞれどのように変化したととらえているのだろうか。それは、協同性志向あるいは関係性志向が高いか低いかでどのような違いがみられるのだろうか。

##### ① メンバー自身の変化(表3参照)

協同性志向については、「F 他の子どもとも積極的に関われるようになった」「G メンバーの気持ちを受け止められるようになった」「D 自分の子どものことがよく理解できるようになった」「B 自分の興味・関心が広がった」ととらえるメンバーが、高位群・低位群ともに多くみられた。両者のうち高位群は、いずれも8～9割を占め、低位群と比較すると顕著に多い。また、「C 人とのつきあい方がうくなった」「E 自分の子どもの育て方に自信がついた」「A 自分が打ち込めるものがみつかった」についても高位群は5～7割を占め、低位群と比べて顕著に多い。とりわけ、「A 自分が打ち込めるものがみつかった」については、高位群が58.6%であるのに対して低位群は26.5%と、両者に開きがあることが注目された。

表2 サークルの評価

		協同性志向		関係性志向	
		高	低	高	低
A	子育てや家庭の悩みをメンバー間で本音で出し合える	85.8	71.4	65.0	80.7
B	子育ての方法についてアイデアを交換することが多い	91.4	77.3	79.4	85.5
C	メンバーはまとまっている	88.3	76.5	76.0	83.4
D	メンバー間に派閥のようなものがあると感じることがある	19.9	17.8	34.2	17.1
E	サークルの運営方針についてメンバー間で意見が割れることがある	17.3	6.9	19.4	11.3

※1%水準で有意差あり

関係性志向については、協同性志向に焦点をあてたときに確認された傾向とは対照的な傾向が読みとれる。協同性志向の高位群に顕著に多かった項目A～Gのいずれにも、関係性志向の高位群・低位群の間には有意な差は認められなかった。ところが、協同性志向の高位群・低位群の間には相関が認められなかった項目HとJには、関係性志向の2つの群の間に有意な差が見られた。関係性志向について、他に差が確認された項目Iを含めた3つの項目は、「H 親同士の間関係がうとうしくなった」「I 自分の子どもにかまう時間が少なくなった」「J 育児に関する悩みが増えた」であり、いずれもサークル加入によるマイナスの変化を示すものであることが注目された。

以上のことから、協同性志向が高いメンバーほど、サークル加入によるプラスの変化を感じている傾向があり、関係性志向が高いメンバーほど、サークル加入によるマイナスの変化を感じている傾向があることがわかった。

## ②配偶者・家族の変化(表4参照)

全般に、サークル加入により、「C 配偶者はサークル活動に参加することに理解を示すようになった」など配偶者と家族に好影響があったと評価しているメンバーが多い。そのなかで、高位群と低位群間に有意な差が確認されたのは、協同性志向に焦点をあてた場合に限られ、「A 配偶者と子育てについて話し合う機会が多くなった」「B 配偶者と子育て以外の話をするようになった」「C 配偶者はサークル活動に参加することに理解を示すようになった」の3つの項目が該当した。

このことから、サークル加入によって配偶者・家族の変化に好影響があったとみなしているかどうかは、メンバーがどれだけ関係性志向を持っているかには関係がなく、協同性志向が高いほど強い傾向があることが判明した。

## ③子どもの変化(表5参照)

協同性志向、関係性志向いずれに焦点をあてても、サ

表3 サークル加入による自分自身の変化

(単位:%)

		協同性志向:		関係性志向:	
		高	低	高	低
A	自分が打ち込めるものが見つかった	58.6	26.5	41.7	43.6
B	自分の興味・関心が広がった	82.6	61.4	68.6	72.9
C	人とのつきあい方がうまくなった	75.8	55.4	62.4	66.6
D	自分の子どものことがよく理解できるようになった	83.6	72.2	76.1	78.3
E	自分の子どもの育て方に自信がついた	67.0	52.0	57.6	59.9
F	他の子どもとも積極的に関われるようになった	90.5	82.0	85.6	86.5
G	メンバーの気持ちを受け止められるようになった	84.5	63.6	73.3	74.6
H	親同士の間関係がうとうしくなった	9.1	8.2	20.7	7.3
I	自分の子どもにかまう時間が少なくなった	15.5	6.0	19.0	10.1
J	育児に関する悩みが増えた	4.9	5.6	16.2	3.8

※1%水準で有意差あり

表4 サークル加入による配偶者・家族の変化

(単位:%)

		協同性志向:		関係性志向:	
		高	低	高	低
A	配偶者と子育てについて話し合う機会が多くなった	69.7	60.1	64.7	65.1
B	配偶者と子育て以外の話題をするようになった	52.7	41.5	44.6	47.7
C	配偶者はサークル活動に参加することに理解を示すようになった	85.0	74.8	78.1	80.4
D	サークル活動によって家族と過ごす時間が少なくなった	4.3	2.7	4.9	3.4

※1%水準で有意差あり

表5 サークル加入による子どもの変化

(単位:%)

		協同性志向:		関係性志向:	
		高	低	高	低
A	自分が夢中になれることが見つかった	55.6	43.4	47.9	49.9
B	自分の興味・関心が広がった	82.1	76.2	80.5	79.0
C	他の子どもとうまく遊べるようになった	85.3	79.4	80.6	82.9
D	周囲の状況に気を配るようになった	63.1	52.8	60.4	57.8
E	集団の中で自信をもって行動できるようになった	71.2	55.9	59.1	64.7
F	他の子どもにも積極的に声がけできるようになった	74.5	58.7	66.0	67.1
G	サークルでの親の活動に興味をもつようになった	52.1	31.4	43.3	42.2
H	人に対する好き嫌いははっきりしてきた	25.4	20.4	28.2	22.5

※1%水準で有意差あり ※5%水準で有意差あり

ーグルを通して、「C 他の子ともとうまく遊べるようになった」「B 自分の興味・関心が広がった」と、メンバーの8割程度が感じている。また、「H 人に対する好き嫌いがはっきりしてきた」など、比較的ネガティブな評価をもつメンバーは、2割程度と低くとどまっている。全般的に、サークル加入によって子どもが成長したと評価している割合が高いことが分かる。

先にみた、配偶者・家族の変化の場合と同様に、サークル加入によって子どもが変化したと感じるメンバーは、協同性志向についてのみ、しかもすべての項目において、高位群の方が低位群よりも有意に高い割合を占めていることが判明した。それらは項目A～Gに現れるように、子どもの変化にプラスの評価をするものだった。

このことから、サークル加入によって子どもの変化に好影響があったと見なしているかどうかは、メンバーがどれだけ関係性志向を持っているかには左右されず、協同性志向が高いほど強い傾向が見られることが判明した。

### (3) 今後の活動意向 (表6参照)

協同性志向の高位群の、約5割が「B 子どもが大きくなっても育児サークルに参加したい」「D 他のサークルとネットワークしたい」と希望しており、約3割に留まる低位群との間に顕著な差が現れていた。また、「A 自分でサークルをつくってみたい」についても、高位群は10.9%と多くはないが、低位群の5.7%とは有意な差が現れている。関係性志向が高いか低いかによって違いがあらわれているのは、「A 自分で別のサークルをつくってみたい」「C 今のサークルを脱退したい」であり、両者とも高位群が高い。関係性志向の高位群には、「C 今のサークルを脱退したい」を希望している者が多い(14.6%)ことも注目された。

このことから、協同性志向が高いメンバーほど、サークル活動を継続あるいは拡大していく意向(項目HABD)が強いのに対し、関係性志向が高いメンバーほど、サークルを辞めたい意向(項目HC)を持つ傾向があることが分かった。

以上の知見をまとめておこう。メンバーは、協同性志向あるいは関係性志向が高いか低いかにより、サークル活動への見方が異なっていた。協同性志向が高いほど、メンバーはサークル活動に対して肯定的な見方をしていた。協同性志向が高いメンバーは、サークル活動については、意見交換が活発に行われ、まとまりがあるという評価をし、サークル加入によりメンバー自身、配偶者や家族、子どもにも好影響があったと認識していた。さらに、現在のサークル活動を継続・拡大する意志ももっていた。

これに対して、関係性志向が高いほど、メンバーはサークル活動に対して否定的な見方をしていた。関係性志向が高いメンバーは、サークル活動については、派閥があったり意見の対立が見られるなど、否定的な評価をし、サークル活動により、親同士の間関係に煩わしさを感じるようになる傾向がみられた。メンバーの中には、今のサークルを脱退したいと考える者も少なからず存在していた。

ここまでの知見に基づけば、サークル活性化の方策として次のような指摘ができる。1 メンバーの関係性志向が高くならないようにすれば、サークルに対するネガティブな評価は現れにくくなる。2 メンバーの協同性志向を高めれば、サークル内の意見交換は活発になり、メンバーはサークル活動に対してポジティブな見方・評価が高くなる。

しかし実際には、メンバーは、協同性志向と関係性志向との両方の特性をあわせもつ。たとえば、自分の行動をサークルの雰囲気に合わせてようとする意識が低い(関係性志向が低い)という点で共通するメンバーの間にも、サークルで自分の意見やアイデアを出したり、頼まれたことを引き受けたりすること(協同性志向)については、積極的な者と消極的な者とに分かれることになる。そこで、以下では、協同性志向と関係性志向が、メンバーのサークル活動に対する見方や評価にどのように作用しあっているのかをとらえることにする。

## 4. サークルの関わり方の4類型

まず、協同性志向と関係性志向それぞれの高位群・低位群をクロスさせた。その結果、(1)協同性志向・関係性

表6 今後の活動意向

		協同性志向		関係性志向	
		高	低	高	低
A	自分で別のサークルをつくってみたい	10.9	5.7	12.1	8.0
B	子どもが大きくなっても育児サークルに参加したい	54.5	38.4	48.5	46.5
C	今のサークルを脱退したい	6.4	6.5	14.6	5.4
D	他のサークルとネットワークしたい	51.6	36.3	49.6	43.6

※1%水準で有意差あり ※5%水準で有意差あり

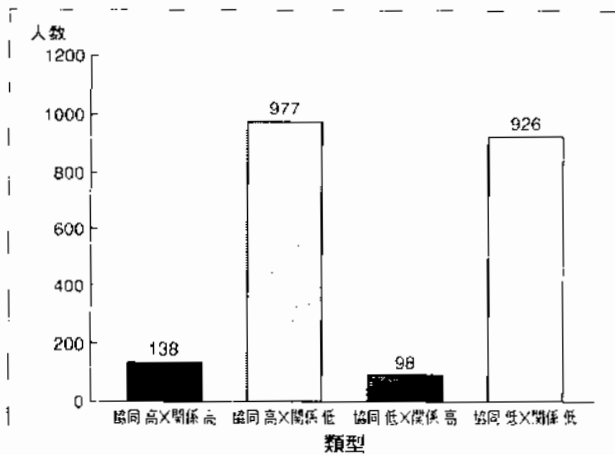


図4 他のメンバーとの接し方の類型別分布  
(協同性志向と関係性志向) (N=2,139)

志向ともに高い群138人(6.5%)、(2)協同性志向が高く関係性志向が低い群977人(45.7%)、(3)協同性志向が低く、関係性志向が高い群98人(4.6%)、(4)協同性志向・関係性志向ともに低い群926人(43.3%)の、4つの群に整理された(図4)。

まず、協同性志向が高く関係性志向が低い群は、サークル内の雰囲気や人間関係に縛られることなく、他のメンバーと積極的に関わりながらサークル活動に携わっていきこうとする人たちが構成されている。「気楽だが熱心に」サークルに参加しているグループと言えよう。

協同性志向も関係性志向も高い群は、サークル内の雰囲気や人間関係を気にしたり、孤立感を感じたりしつつも、他のメンバーと積極的に関わりながらサークル活動に携わっていきこうとする人たちが構成されている。「気遣いながら一生懸命に」サークル活動に参加しているグループにとらえられよう。

協同性志向が低く関係性志向が高い群は、サークル内の雰囲気や人間関係が気になったり、孤立感を感じながらサークル活動に参加しているが、他のメンバーと関わりながらサークル活動に携わっていくことに消極的な人たちが構成される。「気遣いながら消極的に」サークル活動に参加しているグループと言える。

協同性志向も関係性志向も低い群は、サークル内の雰囲気や人間関係に縛られないでサークル活動に参加し、他のメンバーと関わりながらサークル活動に携わっていくことにも消極的な人たちが構成される。比較的、「気楽に気ままに」サークル活動に参加しているグループ、とした。

次に、これらの4つの参加型に、①サークルの評価、②サークル加入による変化、③今後の活動意向、の3点に関するメンバーの見方を比較・整理した(表7)。その結果を

もとに、メンバーのサークル活動への関わり方について、まず、4つの群それぞれにどのような特徴が読みとれるのかを整理した。次に、その特徴は、協同性志向と関係性志向がどのように作用して現れているのかを検討した。

#### (1)「気楽だが熱心に」参加する型

まず、4つの参加型のなかでも特徴のとらえやすい、「気楽だが熱心に」参加する型から検討することしよう。この参加型(「協高関低」)の特徴を表7から読みとると、他の類型に比べて、現在のサークル活動を最も高く評価し、メンバーの満足度も高いことが読みとれる。たとえば、「子育てや家庭の悩みをメンバー間で本音で出し合える」(1-A)「子育ての方法についてアイデアを交換することが多い」(1-B)「メンバーはまとまっている」(1-C)と肯定的に評価する項目に該当するものが、いずれも9割前後を占めている。また、サークル活動に対する否定的な評価に類する「メンバー間に派閥のようなものがあると感じることがある」(1-D)は、16.8%と4つの群の中で最も低い。

同様の傾向は、サークル加入による変化に対するメンバーの評価にも現れている。「他の子どもと積極的に関われるようになった」(2-I-F)、「メンバーの気持ちを受け止められるようになった」(2-I-G)など、サークル加入による自分自身の肯定的な変化を示す項目2-I-A～Gのいずれについても、「気楽だが熱心に」参加する型には、該当者が占める割合が高い。また、「親同士の間関係がうっとうしくなった」(2-I-H)「育児に関する悩みが増えた」(2-I-J)と感じるメンバーは比較的少ない。

サークル加入による配偶者・家族の変化については、「気楽だが熱心に」参加する型に他の参加型との顕著な違いは見られないが、子どもの変化に、肯定的な評価をするメンバーが占める割合はいずれも高い。さらに、サークル活動の継続や拡大を望む(3-A,B,D)メンバーも比較的多く、「今のサークルを脱退したい」(3-C)と考えるメンバーが4つの参加型の中では最も少ない。

以上のように、「気楽だが熱心に」参加する型からは、サークルの現状を高く評価し、生き生きとサークル活動に参加し、サークル活動を維持発展させようとする意欲的なメンバーの姿がうかがえる。

#### (2)「気遣いながら一生懸命に」参加する型

この参加型(「協高関高」)は、現在のサークル活動について、上述した「気楽だが熱心に」参加する型とほぼ同じ項目で肯定的に評価している。また、そのメンバーの割合

もまた、「気楽だが熱心に」参加する型とほとんど同じ程度だった。

しかし、サークル活動のネガティブな側面を表す項目については、この参加型のメンバーは敏感に反応していた。特徴的なのは、メンバーがサークルの人間関係に関して負担を感じていることである。たとえば、「メンバー間派閥のようなものがあると感じることがある」(1-D)が42.0%、「サークルの運営方針についてメンバー間で意見が割れることがある」(1-E)が26.1%、と4つの群の中でも最も高い値を示している。「親同士の間関係がうっとうしくなった」(2-I-H)の19.7%もかなり高い値である。

子どもに関する悩みを抱えるメンバーも少なくない。「自分の子どもにかまう時間が少なくなった」(2-I-J)と感じるメンバーは27.0%と、4つの群で最も多い。「育児に関する悩みが増えた」(2-I-J)、「(子どもの)人に対する好き嫌いがはっきりしてきた」(2-I-H)と感じるメンバーの多さも目立っている。

このように、この参加型に属するメンバーは、積極的に他のメンバーとの関わりを持ちながらサークル活動に参加し、サークル加入による興味・関心の広がり、子どもへの理解の深まりなどさまざまな側面で一定の評価し満足していると考えられる。しかし、同時に、サークル内の人間関係に気疲れし、育児への悩みも抱え込む傾向も現れていた。サークル活動に頑張って参加する割には満足感が得られない、空回りするメンバーが2割程度存在し、そうした不満感が、4つの参加型のなかで17.0%と、最も高い値を示した「今のサークルを脱退したい」(3-C)と感じるメンバーを生み出していると推測される。

### (3)「気遣いながら消極的に」参加する型

この参加型(「協低関高」)には、「気楽だが熱心に」参加する型と全く対照的な傾向が見られた。「子育てや家庭の悩みをメンバー間で本音で出し合える」(1-A)「子育ての方法についてアイデアを交換することが多い」(1-B)が、それぞれ51.0%と63.3%で、7割から9割を占める他の群と顕著な差が現れている。また、「自分の興味・関心が広がった」(2-I-B)「自分の子どもの育て方に自信がついた」(2-I-E)では、それぞれ47.4%、39.8%にとどまり、他の群が前者は6割から8割、後者は5割から7割を占めるのに対して著しく低い。

この参加型は、サークル加入による変化をネガティブにとらえるに項目にも最も高い値が現れている。「親同士の人間関係がうっとうしくなった」(2-I-H)と感じるメンバー

が20.4%、「育児に関する悩みが増えた」(2-I-J)と感じるメンバーが21.6%を占めている。サークル加入によって自分の子どもが「集団の中で自信をもって行動できるようになった」(2-3-E)と評価するメンバーは42.9%にとどまり、6割近くから7割を占めている他の群との差が現れている。さらに、「今のサークルを脱退したい」(3-C)と考えるメンバーが11.3%と少なからず存在する。

「気遣いながら消極的に」参加する型は、子どもについては、「自分自身の関心が広がった」(2-3-B:75.3%)、「他の子どもとうまく遊べるようになった」(2-3-C:72.4%)、自分自身については、「自分の子どものことが良く理解できるようになった」(2-I-D:65.3%)、「他の子どもと積極的に関われるようになった」(2-I-F:79.6%)に、高い評価をおいている。ところが、そうした評価は、メンバーの考えの中では、自分が打ち込めるもの(2-I-A)や、子育てへの自信(2-I-E)、人間関係づくり(2-I-C,G,H)にはつながっていない。サークル内で自己効力感をもつことができず、人間関係と育児に悩むメンバーの横顔がうかがえる。

### (4)「気楽に気ままに」参加する型

この参加型(「協低関低」)は、協同性志向の高い「気楽だが熱心に」参加する型と「気遣いながら一生懸命に」参加する型に比べれば、その値は低いものの、サークル活動に対して肯定的な評価をしているメンバーが多い。この点で、この群は、「気遣いながら消極的に」参加する型と対照的な特徴が現れている。「子育てや家庭の悩みをメンバー間で本音で出し合える」(1-A)、「子育ての方法についてアイデアを交換することが多い」(1-B)と感じるメンバーがそれぞれ73.6%、78.9%と有意な差が現れている。「自分の興味・関心が広がった」(2-I-B)、「(子どもが)集団の中で自信を持って行動できるようになった」(2-3-E)とサークル加入による好影響として評価している点も、「気遣いながら消極的に」参加する型と著しく異なっていた。

この参加型が、サークル活動に対して、全般的に肯定的な評価をしていることは、否定的な項目を支持するメンバーの割合が特に低いことによっても理解できた。「親同士の人間関係がうっとうしくなった」(2-I-H)、「育児に対する悩みが増えた」(2-I-J)、「今のサークルを脱退したい」(3-C)は、いずれも1割にも満たない低い値にとどまっている。

上述した特徴は、「気楽だが熱心に」参加する型とほぼ共通しているが、「3. 今後の活動意向」に違いが見られる。この群は、「子どもが大きくなっても育児サークルに参



加したい」(3-B)は38.8%いるのに対し、「自分で別のサークルをつくってみたい」(3-A)は5.5%と極端に少ない。「他のサークルとネットワークしたい」(3-D)は、「気楽だが熱心に」参加する型は50.4%であるのに対し、この参加型は、36.5%にとどまる。このように、今後の活動意向にも、あくまでもフォロワーとしてのサークルに参加しようとするメンバーの立場が現れている。

## 5. 子育てサークル活性化のために

以上の知見をもとに、メンバーのサークル活動への見方の違いが、なぜ現れるのかを検討し、子育てサークルを

より活性化させるにはどのような支援が必要になるのかを考察したい。

表7が示すように、全般的に協同志向性が高いメンバーの、「1. サークルの評価」と「2. サークル加入による評価」は、協同志向性が低いメンバーに比べて圧倒的に高い。したがって、サークルの意見交換が活発でメンバーの満足度の高いサークルを育てようとするれば、メンバーの協同志向性を高めることが前提となろう。

しかし、興味深いことに、メンバーが感じるサークルへの負担や不満に焦点を当ててみると、これらの要因にはメンバーの協同志向性が常に作用するわけではなく、むしろ、

表7 サークルの評価・サークル加入による変化・サークル活動への今後の関わり方(サークル活動への関わり方の類型別) (単位: %)

		サークル活動への関わり方			
		協高関高	協高関低	協低関高	協低関低
1.	サークルの評価				
1-A	子育てや家庭の悩みをメンバー間で本音で出し合える	74.6	≪ 87.6	51.0	≪ 73.6
1-B	子育ての方法についてアイデアを交換することが多い	89.9	91.6	63.3	78.9
1-C	メンバーはまとまっている	79.6	≪ 89.5	71.4	≪ 77.0
1-D	メンバー間に派閥のようなものがあると感じることがある	42.0	≫ 16.8	22.4	≫ 17.3
1-E	サークルの運営方針についてメンバー間で意見が割れることがある	26.1	≫ 15.9	9.3	≫ 6.6
2.	サークル加入による評価				
2-1.	サークル加入による自分自身の変化				
2-1-A	自分が打ち込めるものがみつかった	56.5	58.6	19.6	27.1
2-1-B	自分の興味・関心が広がった	83.3	82.4	47.4	≪ 62.7
2-1-C	人とのつきあい方がうまくなった	73.9	76.1	46.9	56.2
2-1-D	自分の子どものことがよく理解できるようになった	84.1	83.6	65.3	72.8
2-1-E	自分の子どもの育て方に自信がついた	70.3	66.4	39.8	< 53.2
2-1-F	他の子どもとも積極的に関われるようになった	89.9	90.5	79.6	82.1
2-1-G	メンバーの気持ちを受け止められるようになった	83.3	84.5	57.1	64.1
2-1-H	親同士の人間関係がうっとおしくなった	19.7	≫ 7.6	20.4	≫ 6.9
2-1-I	自分の子どもにかまう時間が少なくなった	27.0	≫ 13.6	7.1	6.0
2-1-J	育児に関する悩みが増えた	12.4	≫ 3.7	21.6	≫ 3.9
2-2.	サークル加入による配偶者・家族の変化				
2-2-A	配偶者と子育てについて話し合う機会が多くなった	72.3	69.3	52.6	60.7
2-2-B	配偶者と子育て以外の話題をするようになった	52.9	52.6	32.0	< 42.3
2-2-C	配偶者はサークル活動に参加することに理解を示すようになった	82.6	85.3	71.1	75.2
2-2-D	サークル活動によって家族と過ごす時間が少なくなった	5.8	4.0	3.1	2.7
2-3.	サークル加入による子どもの変化				
2-3-A	自分が夢中になれることが見つかった	58.4	55.3	34.7	44.2
2-3-B	自分の興味・関心が広がった	84.7	81.7	75.3	76.2
2-3-C	他の子どもとうまく遊べるようになった	86.9	85.3	72.4	80.2
2-3-D	周囲の状況に気を配るようになった	67.6	62.4	51.0	52.9
2-3-E	集団の中で自信をもって行動できるようになった	70.8	71.5	42.9	≪ 57.2
2-3-F	他の子どもにも積極的に声がけできるようになった	74.3	74.6	55.1	59.2
2-3-G	サークルでの親の活動に興味をもつようになった	52.9	52.0	27.8	31.6
2-3-H	人に対する好き嫌いがはっきりしてきた	33.8	> 24.3	20.4	20.4
3.	今後の活動意向				
3-A	自分で別のサークルをつくってみたい	15.4	10.3	7.2	5.5
3-B	子どもが大きくなって育児サークルに参加したい	59.1	53.8	33.0	38.8
3-C	今のサークルを脱退したい	17.0	≫ 4.9	11.3	≫ 6.0
3-D	他のサークルとネットワークしたい	61.0	> 50.4	34.0	36.5

≫1%水準で有意差あり >5%水準で有意差あり

関係性志向のほうが強く作用していることが分かる。たとえば、「親同士の間関係がうっとうしくなった」(2-1-H)、「育児に関する悩みが増えた」(2-1-J)、「今のサークルを脱退したい」(3-C)と感じるメンバーは、協同性志向の高低に関係なく、関係性志向の高い者が低い者に顕著に多い。「メンバー間に派閥のようなものがあると感じることもある」(1-D)、「サークルの運営方針についてメンバー間で意見が割れることがある」(1-E)は、協同性志向が高いことに加えて、関係性志向が高いことが作用して初めて、強く現れてくることになる。

このことから、サークル活動への負担や不満は、関係性志向が高いメンバーが多くなることによって強まる、と指摘できる。言い換えれば、「気遣いながら一生懸命に」参加していようが、「気遣いながら消極的に」参加していようが、他のメンバーへの「気遣い」や気疲れがある限り、将来的には、サークルに不満を感じ、やめたいと希望する可能性が高いことが示唆される。また、サークル内の人間関係や雰囲気はメンバーに同調的な行動を求めるものであったりする場合にも、サークル内に不協和音が発生し、サークルを辞めたいと希望するメンバーが現れる可能性も高い。ここに、他のメンバーへの不必要な「気遣い」や「気疲れ」をしなくてすむようなサークルづくりが、サークル活性化へのひとつの手段として浮かび上がってくる。

そこで注目されるのが、「気楽に気ままに」参加する型が、サークル活性化の前提となると推測された協同性志向が低いにもかかわらず、サークルの評価も高く、自分自身、子ども、配偶者・家族への変化にサークル加入の好影響を認めている点である。サークルとの緩やかなつながりが、気軽に「子育てや家庭の悩みをメンバー間で本音で出し合える」(1-A)、「子育ての方法についてアイデアを交換することが多い」(1-B)雰囲気を作ることが推測される。

サークルとのつながりが緩やかであるがゆえに、メンバーにとってサークル活動は、「自分が打ち込めるもの」(2-1-A)でもなく「自分で別のサークルをつくってみたい」(3-A)「他のサークルとネットワークしたい」(3-D)と感じるほど没頭できるものではない。しかし、メンバーは、サークル活動の効果に一定の評価をし、サークル活動への継続的参加をも望んでいる。また、これらのメンバーには、サークル加入によって配偶者や家族とのコミュニケーションが活発になったと感じている者も多く、「気楽に気ままに」夫や家族にも開かれた子育てサークルづくりの担い手となる可能性もあるのではないだろうか。

本稿の冒頭に紹介した地方自治体の関係者が指摘する

ように、「気楽に気ままに」参加する型のメンバーは、都合のよいときだけ来て長続きしない、主体性を持ってサークルづくりをすることができない存在かもしれない。しかし、「気楽に気ままに」参加する型のメンバーを必ずしもリーダーとしてではなく、サークル内の負担や不満を緩和させる存在として活かすような組織づくり・活動づくりを検討する方法も残されているだろう。

さらに、サークル内人間関係をより負担のないものにするには、メンバーに人間関係やコミュニケーションのとり方などについて、直接学ぶ機会を提供するのも有効な方法となろう。たとえば、グループワークを通してコミュニケーションの仕方を体験的に学習していくようなワークショップを提供する。こうした実践の積み重ねから、サークルメンバーとの協同活動を支える新しい人間関係と参加の形態は生まれる可能性もあろう。

#### <注>

- 1) 厚生省「平成10年度版厚生白書」
- 2) 国立婦人教育会館「地域の子育て環境づくりに関する調査研究」により実施した聞き取り調査より(平成12年3月9日実施)
- 3) 国立婦人教育会館「地域の子育て環境づくりに関する調査研究」により実施した聞き取り調査より(平成11年9月30日実施)
- 4) 子育てサークル研究会(国立女性教育会館内)アンケート調査メンバーは以下のとおり。  
研究会代表(国立女性教育会館長) 大野 曜  
十文字学園女子大学講師・国立女性教育会館客員研究員 安達 一寿  
国立女性教育会館 事業課主任研究官 中野 洋恵  
国立女性教育会館 情報交流課専門職員 宮沢 紀美  
群馬大学助教授・国立女性教育会館客員研究員 結城 恵
- 5) 子育てサークル研究会2001「子育てサークルの活動に関する調査報告書」
- 6) 「あてはまる」を1点、「ややあてはまる」を2点、「あまりあてはまらない」を3点、「あてはまらない」を4点とした。「協同性志向」については、CEFの合計得点が6点以下を「高位群」、7点以上を「低位群」とし、「関係性志向」については、BAGDの合計得点が8点以下を「高位群」、9点以上を「低位群」とした。

(ゆうき・めぐみ 群馬大学助教授・国立女性教育会館客員研究員)